



ハーレム王に 俺はなる!

トリプル美少女を工口籠絡

小説 筆祭 鏡介
挿絵 あいのせりん

立ち読み版



登場人物紹介

Characters

「欲しいと思ったモノは、なにがなんでも
手に入れなければ気が済まない性質なんですの」



ジュエル

隣国ソレイユのお姫様。その美貌は大陸中に知れ渡り、『西の宝石』の異名を持つ。表向きは見聞を広げるという目的で、実は結婚相手を選ぶためにトリブ王国に滞在している。

レオンハルト

トリブ王国の末の王子。王位継承権はないに等しいが、王になるためにジュエルたちを落とそうと画策する。

「この世の全ての人に祝福あれ」



フィーナ

トリーブ王国の大司教の娘で、「トリーブの聖女」として知られている少女。慈愛に満ちた性格の敬虔なシスターだが、レオンハルトに女の悦びを教えられ……!?

「私をどこまで辱めれば気が済むんだ!」



オルガ

トリーブ王国の大將軍の娘。自らも国王の親衛隊隊長を務めるほどの実力を持っている。ところが、レオンハルトに狙われ、その美しい女体を貪られてしまう。

序章	ハーレム王に俺はなる！	007
第一章	聖女様は超敏感な即イキ体質	016
第二章	女騎士を陵辱風エロ籠絡	071
第三章	ダブル美少女をご奉仕調教	114
第四章	お姫様の飴と鞭な初体験	135
第五章	トリプル美少女とハーレムエッチ	191
終章	ハーレム王に俺はなった	253

第一章 聖女様は超敏感な即イキ体質

母の出自や自分自身の庶民的な育ちもあって、今までほとんど出席していなかった王家主催のパーティに、レオは久しぶりに顔を出していた。

その会場を見回すと舞踏会用の大広間から庭園までが開放され、着飾った男女が思い思いに談笑している。

(相変わらず、贅沢なことしてるな)

大きなテーブルには、ほとんど手を付けられていない豪華な料理が並んでいた。

おそらくこのまま、その大半が廃棄されることだろう。

(俺が王様になったら、こういうところから改革していつてやる。……そのためにも)

少年はその中を縫うように歩き、目当ての人物を探しはじめる。

「あっ。アレっぽいな……」

遠目にもわかる人ばかりがパーティ会場の一角にできていた。

レオが近づいていくと、その人だかりの中心に一際鮮やかな赤いドレス姿が見える。

「これ、口に合いませんわ。違うモノと取り換えてくださいませんか？」

彼女は端を一口だけ齧ったサンドイッチの乗った皿を、とても優雅な仕草で横にいた男

に渡している。

(つて、あれ兄さんだ……)

まるで召使いのように、皿を渡された相手は兄の一人だった。

レオでも正確に何番目か覚えていない、二十人以上いる兄の中の十何番目ぐらいではあるが、それでもこの国の王子には変わりない。

「それでは、フルーツのパイでも持ってきましようか」

その兄が怒るでもなく、むしろ彼女に用を言いつけられたことを喜ぶように、料理の並ぶテーブルへと向かっていく。

「やっぱりあの子か……」

その本来ならばあり得ない光景を目の当たりにして、彼女が目当ての人物——ソレイユ王国の姫だと確信する。

(確かに、噂通りの……いや、噂以上の美少女だな……)

雪のように白くて肌理きめ細かな肌に、手入れの行き届いた腰まである栗色のウェーブヘア。瞳は流麗な弧を描く二重瞼と長い睫毛に縁取られ、綺麗に通った鼻筋と形のいい唇が、小さな顔に完璧なバランスで配置されている。

スタイルのよさもズバ抜けていて、赤いドレスから伸びる手足はとても細くて長いのに、大きく開いたドレスの胸元からは、豊かすぎる丸みが二つ覗いていた。

レオが今まで抱いてきたどんな女性よりも美しく、醸し出される気品に関しても、トリ
ーブ王家の妃や姫以上。

（これが『西の宝石』——ジュエル姫、か）

彼女の美貌の噂は母国のソレイユ国内に留まらず、大陸全土に鳴り響いていた。

なので異名も『ソレイユの宝石』ではなく、もつと梓を広げて『西の宝石』である。

その『西の宝石』は見聞を広めるために隣国のトリーブ王国に旅行をしに来た、ということだが——本当の目的は結婚相手探し、と噂されている。

何しろこの大陸では、ここトリーブと隣のソレイユが二大強国で、彼女に相応しい夫となるとトリーブの王族ぐらいしかないのが現状だ。

そのためまだ独身の兄たちが、かなり色めき立っている。

彼女のハートを射止めればソレイユ王国の後ろ盾ができて、兄弟の中でかなり格上の地位を得られるからだ。

（つまりあそこにいる兄上たちも、彼女の色香に引かれているだけではないってことだ）
彼女に群がる男たちの大半が、レオの兄だった。

この包囲網では、上級貴族の子息ですら迂闊に近づくことができないだろう。

「ジュエル様、今度、私の屋敷においでください。私が所有している劇団に、お好みの芝居をさせてご覧にいきましょう」



「もうそろそろソレイユの味が恋しくなってきたのではないですか？ 今夜にでも私の抱えているシェフたちに、ソレイユ料理を用意させましょう。私の屋敷まで来ていただければ、ソレイユ産のワインも揃っていますよ」

今も兄たちが必死に自分をアピールしている。しかしジュエルは手にした扇を揺らめかせているだけで、兄たちの誘いに乗ろうとはしない。

(あーあ。あれじゃあ、ダメだ)

表情にこそ出していないが、彼女が退屈しきっていることがレオにははっきりと見て取れた。

いろいろな意味で兄たちのセンスのなさに呆れてしまう。

相手はトリーブと並ぶ大国の、現国王の娘なのだ。

自国内の女の子を口説くなら自分の財力を誇示するような方法も有効かもしれないが、彼女が相手では、あの程度のことでは薄っぺらく見えるばかりである。

(うーん。母上が言ってた通り……。いや、それ以下だな……)

今までは兄たちの女の子の口説き方など興味もなかったのですが、こうして聞き耳を立てるようなこともなかったのだが、改めて目の当たりにするとその酷さがよくわかる。

そしてこの兄たちに比べれば、自分は遥かにマシだと確信した。

「……よし」

頭の中で、ジュエルを口説く展開をいくつかシミュレーションしながら、近づいていく。一つに絞らないのは、女の子を口説くということが生ものだからだ。

相手の気持ちやその場の空気に合わせて、臨機応変に対応する。

要は口説くというよりも、まずは顔見知りになって仲よくなるのが目的だ。

自分の本領が発揮できるのは、むしろその後である。

「お待たせしました。リンゴのパイです」

ちようどいいことに先ほどパシリに使われた兄が戻ってきて、赤いドレスを取り囲んでいる王子の集団が割れる。

レオはその後ろについて、ジュエルを落とすための第一歩を踏み出した。

（よし！これがハーレム王への記念すべき第一歩だ！）

しかし――。

「それにしても今日もジュエル様はお綺麗ですね」「まさに生きた宝石のようだ」
取りまきの兄たちがすぐに壁を復活させて、再び近づけなくなってしまう。

彼らを割って強引に近づこうとしても、その兄たちが少しでもジュエルに近づこうとポジション争いをしているため、とてもではないが自分が入っていけない隙間はない。

「く、くそ。ちよっ。じ、邪魔ッ」

とジュエルの視界にも入らない後方で、レオが悪戦苦闘をしている内に――。

「今日はもう疲れましたわ」

異国の姫は兄から手渡された皿には手を付けず、そのまま会場の出口に向かって歩きはじめてしまった。彼女を取りまいている兄たちは、それでもついでいこうとするが——ジュエルは自国から連れてきている侍女集団の中に入っていつてしまう。

それでも兄たちの数人は、ジュエルにしつこく声を掛け続けているが、相手がもうコミユニケーションを取りたくない、と行動で意志表示しているのだから逆効果だ。

女の気持ちが変わらない無粋な男、として今後はまともに相手をしなくなることだろう。(つていうか、すでに全員がそんな感じで判断されちゃってるっぽいな)

そんなことを想いながら、パーティ会場から出ていく異国の姫と、それを茫然と見送る兄たちの後ろ姿を眺めていた。

レオのハーレム王への第一歩は、開始直後の不戦敗。

しかしこの程度のことでは気持ちは折れたりしなかった。

今までの成功率の低いナンパ経験で、女の子に無視されるのには慣れっこだ。

むしろジュエル本人とそれを取りまく環境を身をもって知り、これでやつと彼女を攻略するための策を具体的に考えられる。

「待ってろよ。絶対に落としてやるからな」

レオはそう呟くと、口の端をニヤリと小さく吊り上げた。

「い、いいぞ。そのまま続けろっ——ああっ——」

二枚の美しい桃色舌が、己のペニスを献身的に這い回る卑猥な光景を見下ろしながら、レオは思わず愉悦の声を漏らしてしまう。

「はああん♥ レオンハルト様がこんなにも気持ちよさそうなお声を出して♥」

「もっともっと気持ちよくなってください——クチュ、んんん、れろおオン♥」

二人にはそれがたまらなく嬉しかったようで、すぐに唇も使って肉棒をねぶり出した。ペニスの左右にフィーナとオルガが吸いつき、シスター帽と黒髪のポニーテールを揺らしながら、その美貌を横に滑らせていく。

その動きに合わせて、仁王立ちしている両脚がビクつくほどの快感が迸ってくる。しかしこの二人では動くスピードがまるで違う。

無論、オルガが早く、フィーナはゆっくり。そのため左右からペニスにもたらされる負荷がバラつき、気持ちよさの芯がズれる時がある。

「お前たち、もっと動きを合わせろ。仲間同士でちゃんと協力しろって、言っただろう——おおう。ああっ、そうだ。い、いいぞ」

男根の左右を滑る二人の動きが一致すると、彼女たちが口を押し当ててくる力がペニスを挟んで相殺され、柔らかな唇の気持ちよさだけが肉棒の芯まで染み込んでくる。

明らかに、一十一が二以上の快感を生み出していた。

マズい。ダブルフェラを通して二人を仲間にするよう調教していたら、予想以上に気持ちよすぎてもうイキたくなってきた。

射精に関して言えば、我慢をしようと思えばいくらでもできるが、やはりここは――。
「もうそろそろイクぞ。二人仲よく協力したご褒美に、俺のザーメン、たっぷりぶっかけてやるからな」

ちゃんとお前たちが協力すれば、ちゃんとその見返りがあるんだぞ、ということをお教える方がいいだろう。

こちらを見上げる二人も口奉仕を続けたまま、瞳を嬉しそうに細めている。
彼女たちが握りあつてる手が、キュッと強く握られたのはつきりと確認できた。

「いいか。俺が『ぶっかけ顔をしろ』って命令したら、お前たちはすぐにチンポの先に顔を移動させる。そこで顔を上げ気味にして、大きく舌を出すんだ。それがぶっかけてもらう時の顔だからな。忘れるな」

二人は男根への口奉仕を続けたまま「ふあい」「わかりましたあ」と従順に答える。

「今日は二人一緒だからな。一人占めしようとするな。チンポの前でぶっかけ顔をして、びったり頬を合わせて待つてろよ」

レオは自分が口に行っている卑猥な命令で、自らの昂りも深めていく。

「はああん♥ オチンチンが石みたいにガチガチになってますう♥」

「イッてくらしい♥ レオンハルト様のオチンポいくところ、みしてくらしい♥」

二人が互いに左右から唇を触れあわせるようにして、男根の胴部分をぐるっと包み込み、根本から肉先までをヌルンヌルンとタイミングを合わせて滑らせていく。

フィーナの舌は竿肌にペツタリと張りつき、オルガはレロレロと躍り舐め。

ダブルフェラならでは、全身が煮え立つほどの快感にレオは気持ちよく限界を迎える。「ああっ！　いくぞ！　ぶっかけてやる！」

二人は言われた通り、ペニスの側面から素早く前へと移動した。

桜色に上気した頬をびったり合わせ、舌を大きくこちらに突き出してくる。

そしてレオに命令されたわけでもないのに、彼女たち自らその出した舌先までびったりと触れあわせる。

「よおうしッ、ごほうびだあああああ！」

レオは彼女たちが誕まみれにした男根を掴み、その触れあっている二枚の舌に狙いを定めた。ただエロティックなだけでなく、この二人を進んで協力させる、という目標の達成を象徴しているようなその光景に向けて一扱きし、

——どぶりゅん!!

剛直の中身を思いつきり放出した。

勢いよく弾き出された白濁は、狙い通り桃色の肉片に直撃し、そのままパッと二人の



口回りを汚す。

レオはその光景に恍惚と目を細めながら、扱く肉棒を僅かに上にズラし、

——どぶん！ どぶドリゅん！

舌だけでなく、頬をびったりと密着させている二人の美貌に、残りの精液を万遍なくぶちまけていく。

「んはああん♥」「んくらん♥」

舌に『ご褒美』の精液を浴びたままのため、言葉を発せられない二人は、恍惚した表情のまま牡の排泄液を受け止め続ける。

少年は最後の一滴まで彼女たちの美貌にぶちまけ終えると、女騎士の頬で残滓を拭った。「よし。まずは舌に出された分を飲め」

射精直後の荒い息交じりの命令に、二人の美少女は重ねあわせていた舌を戻す。その際、二枚の舌上にこっつりと盛り上がっていた白濁が分離され、粘っこい糸を引く。彼女たちはその糸が切れぬまま唇を閉じ、何の躊躇もなく喉を共に上下させる。

「んはああ♥ こんな味なんです♥」「こっつりしてて美味しい♥」

二人はまるで強い酒でも飲んで酔ったように、さらにその美貌をポーツと弛緩させた。

「次は顔についてるのをお互いに舐め取れ。まずはフィーナからだ」
この命令にも彼女たちは素直に従う。

まずは横に並べていた美貌を向かいあわせ、オルガがうっとりした表情のまま精液がたつぷりとへばりついている己の頬を相手に差し出す。

フィーナは愛おしそうな表情で顔を寄せ、まずはその白い塊に唇ごと吸いついた。

そして大半を飲み込んでから、残りをペロンペロンと大胆に舐め取っていく。

その間オルガは舐められている頬側の瞳を閉じたが、それは嫌悪ではなく、くすぐったそうな柔らかい表情。

(な、何かこれはこれで……エロいな……)

ダブルフェラをする前に、互いに牽制していた時とは雰囲気が変わるで違ふ。

そしてフィーナが女騎士の顔の汚れを全て舐め取ると、今度は立場を逆にする。

清楚な美貌にたつぷりとへばりついた白濁を、オルガが丹念に舐め取りはじめた。

それはまるで仲のいい牝猫同士が、互いに毛繕いをしながらじゃれあっているような光景である。

「よし。それじゃ最後に、お互いの舌を舐めあつて、自分たちの舌まで全部綺麗にしろ」

もう完全に二人とも自分の言いなりだと思ふが、最終チェックの意味も込めて命令する。オルガに頬をむしゃぶるように舐められていたフィーナが、その美貌を横に向けた。

二人は同性同士でキスをする事に対する抵抗感など一切見せず、あっさりと唇を重ねあわせる。

(このおっぱいも、マジでエロすぎる！)

最初は筋肉が動く範囲で大きく上下に揺れていたのだが、そのサイズが大きすぎるため、可動範囲を動ききる前に逆に揺れ、最終的には乳房が元の位置で小刻みに揺れ出す。

それこそレオでもオナニーのオカズにできるほどの、エロティックすぎる光景に、

——パンパンパンパンずばずばぱん！

と腰の動きがますます加速していつてしまう。

すると数の子天井ならではの強烈な摩擦感が肉カ리를襲い、頭髪が全て逆立つほどの愉悦が全身を駆け巡る。

「ああああっ！ コレらめえええええ！ またっ、またイッてしまいますわああ！」

ジュエルはもう言葉責めに反論もできず、顎を仰げ反らせて絶叫する。

「いいぞイケ！ 初めてのセックスのクセに、オナニーのしすぎで何度も簡単にイッチャうドスケベ姫っぷりを見せてみるおおお！」

レオがその言葉の勢いのまま、骨盤が震えるほどの勢いでガツンと腰を突き入れたその直後——ビクビクビクビクビクッ！

赤いドレスを着たままの女体が、本日二度目の絶頂に達する。

(うわっ!? さつきよりもビクビクが凄いッ!?)

数の子天井に深く竿肌を埋め込んだまま、レオは暴発しないように再び全身を力ませた。

とにかく性器自体の締まりがいいため、絶頂の震えがダイレクトに響いてくる。

「くあ……つああ………つふああ………」

そうしてジュエルがエクスタシーの大波を終え、息が整うのを待っていると——スンスン、と鼻をすすする音が聞こえてきて、レオは慌ててそちらに視線を向けた。

(わっ!! ヤバッ!!)

イッてほっくりしてると思っていたら、お姫様はその瞳にガチ涙を湛え、切なそうな視線でこちらを見上げていた。

「わ、わらし……本当にイクの初めてですわあ。自分でなんて、一度もしたことないのに……グスッ……ひ、ひどいですわあ」

レオが想像していた以上に、ジュエルは純粹だったようだ。

あまりに相手のリアクションがよすぎて言葉責めに熱が入りすぎ、彼女がここまで追い詰められていることに気付けなかった。

いやむしろ、こうして泣いてしまうほどだからこそ、レオが夢中になるほどよかったと言うべきなのか。

「わ、わかってる」

レオはすぐにお姫様の頭を優しく撫で出した。

オナニー程度のネタを真に受けてガチ泣きするなんて、マジでこいつウブで可愛いな、

と思いながら早速フォローに取りかかる。

「お前が今までエッチなことを一切してこなかったことなんて、ちゃんとわかってるって」
「ほ、本当ですか？」

「当たり前だろ。だってイクッてことを知らなかったんだから。とにかくお前の初めては俺が全部頂いた。キスも、処女も、イクのもの」

「はい♥」

瞳にまだ涙を残したまま、ジュエルが照れたような笑みを浮かべる。

「よし。これほど簡単に機嫌が直るのも、飴と鞭を織り交ぜたこの籠絡セックスが効いている証拠である。」

「これがお前を初めてイカせたチンポなんだろ？」

レオはジュエルを見つめながら、腰をゆつくりくねらせた。

「はああん♥ そうですのお♥ 私の初めてのおちんぼですのお♥」

誤解が解けたことがよほど嬉しかったようで、先ほどまでは言うのを躊躇していた卑猥な単語もスムーズに口にしてくる。

「ほら。一緒にもっと気持ちよくなるぞ」

グチュグジュルツ、と数の子天井がもたらす快感を肉カリでしっかりと味わいながら、ジュエルの腹の中をたっぷりと掻き回す。

「くうううん♥ いっしょお♥ レオンハルト様と一緒に気持ちよくなりませすのお♥」
大陸一の美貌が眉間も頬も完全に緩みきり、甘い喘ぎ声を上げながら、ハートマークの浮いた瞳でこちらを見つめてくる。

「ジュエル。俺の女になるな」

「もちろんですわ♥ 私、レオンハルト様の女になりますのお♥」

「これからは、俺が言うことは全て聞くんだぞ」

「はい♥」

「舌を出せ」

ジュエルは完全に理性が蕩けきった顔のまま、んああ、と舌を突き出してくる。

（うおっ!? やっぱり絶品の舌してる!）

色は鮮やかなピンク。長さは顎に届くぐらい。

とても肉厚で先端の尖ったその味覚器官が、レオの目にはこれ以上ないほど卑猥で綺麗なモノに映っている。

「そのままジツとしてろよ」

レオはその絶品舌に向かって、口内の唾をたっぷりと垂らした。

桃色の美しい肉片に、白く泡立つ粘液がへばりつく。そして――。

「飲め」

と命じると、ジュエルは何の躊躇もなく、こちらを見たままゴクンと飲み干した。

(よし。完璧に墮ちきってる)

もうわかりきっていたことだが、今のが一応、最終確認だ。

これで自分がハーレム王になるための手札は揃った。

相手がこれ以上ないほどの美少女なので、楽しんで事に当たれたが、それでも目的を達成するためいろいろ計算して事を行ってきた。

これでもう、あとは好き勝手に楽しむだけだ。

「ああっ！ ジュエル！」

大陸一の美少女を相手に、素の性欲を爆発させた。

「くはあああん！ レオンハルトさまあああああ！」

突然の激しい突入に、ほっこりしていたジュエルの女体が仰け反った。

かまわずレオは数の子天井の名器を、抉るように突きまくる。

正直、これほどの美少女相手の名器セックスにここまでよく耐え抜いた。

(もうコレで、イクの我慢しなくてもいいからな！)

レオは別に遅漏なわけではない。

昔、踊り子のお姉さんに言われたのだ。

射精のタイミングをコントロールできるのが、本当にセックスの強い男だと。

それはただ射精しない、という意味ではない。

相手の絶頂に合わせてピタリと射精を決めるのが、女の子を満足させるポイントなのだ。そして、そのタイミングで膣内射精をするのが男にとっても一番気持ちいいことも、レオは無数の経験で知っていた。

「ああっ！　そ、そんなにしゃれたらあ、またイッてしまいましゅわああああああ！」

二度の絶頂ですでにイキ癖が付いてしまったのか、それとも生まれつきの体質なのか。呂律の怪しくなった喘ぎ声で、ジュエルがまた限界を叫ぶ。

「一緒にいくぞ！　次は俺もお前と一緒にいくからなあああ！」

レオもすぐに理性の箍をはね飛ばし、絶頂直前の痙攣にも似た小刻みな突入を開始する。

「ふあああああ！　いっしょおお！　レオンハルトさまといっしょおお！」

「このままジュエルの中に出すからな！　ザーメンおもいっつきり、お前の子宮にぶちまけてやるからなああああ！」

「ああ！　らしくらさいいい！　れおんはるとしやまのぜんぶうう！　じゅえるのなかにはきらしてえええええ！」

そんなジュエルの絶叫を聞きながら、レオは思いっきり腰を突き入れ動きを止めた。

大陸一の美少女姫の最深部に、己の肉先を深く食い込ませたその直後、

——ドギュドぶどりゅドブン！　どりゅドブドぶん！

この世で最も高貴な子宮の中に、己の生命の原液を思うさまぶちまける。

「んはあああ！ わらしのなかれえ、あちゅいのれてるうう！ おちんちんがバクハツして、わらしのなかで——あ——————っ！」

膣内深くに埋まった男根の脈動を、そのまま増幅させたように全身を激しくビクつかせていたお姫様が、一際甲高い絶叫と共に、

——ぶしゅああああああああああああ——

盛大に潮を噴き出した。

その熱い飛沫に股間を濡らしながら、レオは脳味噌の皺の奥まで痺れるような満足感に浸りきる。

(三人とも……本当に凄い)

これでフイーナとオルガに続き、ジュエルまでも膣内射精に合わせて潮を噴き出した。

しかしレオの経験では、性を繋げたまま潮吹く女の子は滅多にいない。

通常、いくら凄い絶頂感に襲われても、ペニスを抜かなければ、潮は噴かない——噴けないものである。

ハーレム王になるための手札としてだけでなく、純粹にセックス相手の女性としても最高級な三人が揃った。

「つふあああ……あああ……つくふああ……」



ジュエルの舌がレオのアナルを深く貫いてきたからだ。

少年はたまらずオルガを強く抱きしめて、ねっとり絡めあわせていた舌も肉悦のために強張らせてしまう。

(ヤ、ヤバっ!?)

スローペースなまったり3Pで、気持ちも身体も緩みきっている時に、強烈すぎるジュエルのアナル舐めに襲われて――。

「っぷふぁあ！ ああっ！ も、もうイク！」

レオは限界を叫び、ゆっくりとくねらせていた腰を、猥染^じみたスピードで小刻みに突き入れはじめた。

それでも動く範囲が狭いだけに、ジュエルの長い舌はしつかとレオのアナルを捉え続けている。

「んちゅんん♥ イツれくらさい♥ レロレロペロペロんんん♥」

他国の姫に奉仕場所を奪われた聖女様も、こちらの脇腹辺りを舐め出して、少しでもレオの絶頂感を押し上げようとしてくれる。

「ああああああ！ いぐうううー！ いっぢやううううー！」

そして性的に感極まったオルガは、レオの背中にしがみつかせていた両手を自らの頭の上に上げながら、後頭部をベッドに叩きつけるようにして弓反った。



その勢いは凄まじくこちらの身体が一瞬浮くほどで、女体のバネが半端ではない。

レオの今までの経験で、これほど激しいイキっぷりは初めてだ。

(中のチンコの締めつけも凄すぎる！)

ただでさえ牝肉の密度が濃くてきついのに、さらに膣壁たちが内側に収縮するように窄まって、男根にもたらされる快感量が途轍もない。

「俺もイクぞ！ オルガの中でッ！ ああッ！ オルガあああああああッ！」

レオがそう叫ぶと同時にフィーナに舐められている身体がブルリと震え、ジュエルに挟られているアナルが窄まり、

——どぶん！ どぎゅドプ！ ドブどぶドブン！

絶頂を極めている女体の最深部に、己の絶頂液を勢いよく注ぎ込む。

「んはああああ！ あついでてるうう！ いちばんおくにたくさんでてるううう！」

その瞬間、オルガは再びブリッジするほど腰を浮かせて、

——ぷしやああああああああああ！

男根で深く女体を貫かれたまま、再び潮を噴き出した。

レオは二人の美少女に舐め奉仕をさせたまま、エクスタシーのブリッジをしているオルガに長く膣内射精し続ける。

「つくふああ……つくふああ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまめる

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!